

エッセイ

楽しい“虫音楽”の世界

(その21 「害虫唱歌」を聴く)

《最終回》

昆虫芸術研究家

柏田 雄三 (かしわだ ゆうぞう)

瀬戸口明久著の「害虫の誕生—虫からみた日本史」(ちくま新書)に明治37年帝国大学教授佐々木忠次郎校閲の《害虫駆除唱歌》のことが記載されている(以下「虫」を「虫」と表記)。その詳しい歌詞を探していて井上頼国作詞、山田源一郎作曲の《害虫唱歌》という明治40年の別の曲を見つけた。瀬戸口氏によると当時「害虫駆除唱歌」は珍しくなかったそうなので、そのような曲の一つなのだろう。

井上・山田の《害虫唱歌》は「害虫駆除に往く時の歌」「害虫を駆除して帰る時の歌」「稲の害虫」「麦の害虫」「桑の害虫」「蔬菜其他の害虫」「果樹及茶の害虫」「益虫の歌」「益鳥の歌」の八つの部分に分かれ、それぞれ複数の節(番)でできている。

稲の害虫の部分は次のような内容である。

螟虫(ずいむし):ニカメイチュウ, サシカメイチュウの卵塊を苗代で除去する。蛾を捕虫網で捕獲, 誘蛾灯で誘殺。芯枯れ茎や白穂を抜き取る。刈株や藁の中の幼虫を焼く。男の子も女の子も心合わせて駆除しよう。

浮塵子(つまぐろ, 背白, 鳶うんか):水面に石油を浮かべ払い落す。

苞虫:幼虫, 蛹を除去。蝶を網ですくう。

メイチュウには9節(番)も充てられていて, 最大の害虫であったことがわかる。佐々木の《害虫駆除唱歌》でもニカメイチュウの防除方法が詳しく歌われているし, 当時ニカメイチュウ幼虫採集のコンテストが盛んに開かれていたことから知れる。

筑波常治著の「五穀豊饒」によると, 幕末から明治初期に活躍した熊本の篤農家幸島直言は《虫駆経》と称する俗謡を自費で印刷し県下の農家に無料で配布した立派な人で, 幻燈と講話によってもメイチュウの害や防除方法を説いた。この曲は《虫害あほだら経》の別名を持ち, メイチュウの被害や防除法を詳しく述べている。「阿呆陀羅經」とは馬鹿を意味する関西語の「あほだら」を仏教の陀羅尼, 曼陀羅等にこじつけて経文めかしたもので, 江戸中期に大阪で発生し, 大道芸として人気を呼び

明治時代には寄席芸としても行われた時事風刺の滑稽な俗謡である。浪花節の原型の一つだと言われる。

(社)日本植物防疫協会資料館発行の「薬剤による螟虫の防除」(石倉秀次)によると明治12年の国の報告には9県で薬剤を用いた螟虫の防除法が記されているそうだが, 明治40年のこの《害虫唱歌》では専ら物理的な手段である。

《害虫唱歌》を音楽的な面から見てみよう。歌詞は七五調である。七五調とは7音と5音を繰り返す形式のことで, 《鉄道唱歌》《荒城の月》《軍艦マーチ》《花》等を例に挙げればわかりやすい。明治時代からの唱歌, 寮歌, 軍歌や校歌によく使われた。

また, 曲は「ピョンコ節」で書かれている。「ピョンコ節」とは4分の2拍子または4分の4拍子で, 1拍を付点8分音符と16分音符を繰り返し飛び跳ねるような曲を言う。リズムカルで曲を覚えやすく長い歌詞を伴う唱歌によく使われた。《鉄道唱歌》《軍艦マーチ》や前記の《害虫駆除唱歌》もこの様式である。

《害虫唱歌》には, 親しみやすい七五調の歌詞とピョンコ節で害虫の怖さと食糧の増産に国民の目を向けさせようとした「お上」の意向が感じられる。渡辺裕著の「歌う国民」(中公新書)にもこのような唱歌が生まれた背景が書かれていて一読に値する。

害虫唱歌

(へ調四分の二)

活遊ニ

井上 頼国 作詞
山田源一郎 作曲

セメタルチーキハクエノアダ

ヨセクルムシハーノノアダ

イザヤーフレラハノノタメ

アダナスムシトータカハム

《害虫唱歌》の楽譜